



2025. 3. 18
No.244

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

ゆうちょ銀行から(記号)19710

(番号)02218911 多銀行からは

(店番)978(口座番号)0221891

ヒグチミナコ(郵送料年間2,000円)

一日も早い平和を！

ドキュメンタリー映画「ノー・アザー・ランド故郷は他にない」と「犬と戦争 ウクライナで私が見たこと」を観て

3月11日東日本大震災と福島原発事故から14年が経ちました。暮らしていた人々はいまだに地元に戻れず、北海道に移住された方たちも多くいらっしゃいます。岩手県大船渡市では山林火災が発生し自宅などの建物被害は210棟だそうです。こんな大きな被害は想像もつきませんでした。被害に遭われたみなさまにお見舞い申し上げます。

北海道は、3月になってもドカ雪が降り、雪かきに四苦八苦しましたが日差しは春めいてきました。でも桜が咲くのはまだ先です。



3月10日、氷点下8度の朝、青い空に木々に雪の花が咲きました。(みな子)

「ウクライナやガザに平和を」と日曜デモが呼びかけられていますなかなか一歩を踏みだせません。ミサを終えてから行こうと思えば参加できるのにそこから離れてしまうと気後れがしています。

長い介護生活は私の生き方への変化を余儀なくされました。全国で原発再稼働の動きも心配です。今回はパレスチナとウクライナでの戦争がドキュメンタリー映画になったので紹介します。

北海道パレスチナ医療奉仕団の猫塚義夫団長は、デモの時に、「パレスチナの過酷な状況は手にとるようにわかるので是非映画を観てほしい」と訴えました。(行けなかったのでユーチューブで観ました。)

撮影したのはパレスチナ人のバーセルと、イスラエ

ルのユヴァル。バーセルが子どもだった頃から両親は活動家で父は逮捕されました。バーセルは西岸地区のマサーフェル・ヤッタで生まれ、子どもの頃からデモに参加し、17歳からイスラエル軍の蛮行をカメラで撮り続けたという。家はブルトラーで一瞬にして壊されます。その現場も写っています。それでも住民は洞くつで暮らして抵抗しますがイスラエ軍は威嚇します。また子どもたちの目の前で学校が潰されます。私はあまりの惨たらしさに言葉を失いました。蛮行の現場には、バーセルと共にイスラエルの友人ユヴァルが必ずいるのです。彼は村に取材に来てバーセルと親しくなり、家屋の破壊があるたびに一緒に取材してきたのです。この行為はとても勇気があることです。イスラエル関係者から「敵を助けるユダヤ人！」となじられても屈しません。二人の友情を描くと共に、頭を撃たれ



たらみんなで世話する姿やバーセルの父が釈放されると村中で祝う姿も描きます。ユヴァルが「パ

レスチナ人に自由がなければ、イスラエルの安全はない」と断言します。二人の願いと思いが世界中に届いてほしい。映画はベルリン国際映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞を、米アカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞を受賞しました。監督はパレスチナとイスラエルの2人ずつ。

「犬と戦争 ウクライナで私が見たこと」は山田あかね監督が3年間ウクライナに通い「戦場にいる犬たちに何が起きたのか」取材しました。

人間が起こした戦争によって、動物も苦しみ、無惨に命を落とす現実に目を向けています。テレビでも伝えられないその死を悲しむ人々、世界中からやってきたボランティア



の人たちや動物愛護の活動をしている人たちが写しだされます。命がけで動物を救う人々の、尊い活動を私は初めて知りました。日本では福島原発事故がありましたが、飼い犬や猫はどうなったのでしょうか？小さな命を救おうと世界中から駆け付けた人々の奮闘に心が洗われました。「自分の命が危険でも動物を救いたい。私の生きる理由なんだ」。戦場で動物の救出活動を行なっている元兵士トムの言葉です。トムは別の戦争で、重いPTSD(心的外傷後ストレス障害)を発症して、半年間、家から出られなかったと語り、そんな時に懐いてくれた犬に救われ、保護犬を預かるようになったそうです。山田監督は「犬は人間の最も近くに動物。彼らを通して世界を見ると、人間の姿が浮き彫りになる。犬の向こう側には必ず人間がいる」という言葉が胸に刺さりました。

二本の映画から、人も動物も一瞬にして奪われ、住む家も貴重な建築物もすべて破壊されていく様に怒りと悲しさでいっぱいになりました。

トランプ大統領がホワイトハウスでの会議で、ウクライナのゼレンスキー大統領に、「礼儀がない」「取引のカードがない」と激怒して、停戦交渉をぶち壊しました。その影響なのか、ウクライナでは各地のエネルギー施設などミサイルやドローン攻撃を受け、14人が死亡したと報じられています。自国の利益ばかりを優先させるトランプこそ反省すべきです。ウクライナにヨーロッパも支援の声が上がり始めています。日本もその輪に加わってほしい。(樋口みな子)

「おめでとうノーベル平和賞！被爆者の願い世界に届け！平和コンサート&講演の集い」に参加して 文・写真 田中雄二



稲城市で平尾平和の郷の会((平尾9条の会)が主催して、小学校やひらお保育園でやってきた「平和の集い」が2月15日に開かれました。私もこれまで10年以上、運営委員をしています。

今回、平尾地域や稲城市内外から140人を超える参加があり、平尾の歴史に残ると言ってもいい大きなイベントともなったことを感じています。

前半の第一部「平和コンサート」では、会場であるひらお保育園園長の始まりの言葉を受け、寺島尚彦さんの歌を歌い継ぐ男性合唱団「アンサンブルテラ」さんたちの歌声(上写真)が、キレの良いピアノと一体となってやさしく力強く、さらにフルートの爽やかな演奏とともに、ホールいっぱい心地良さがあふれるコンサートになりました。

第二部「日本被団協・濱住治郎さん(写真右上)のお話し」ではオスロでのノーベル平和賞受賞式典の様

子や現地での姿が、映像と共に細やかに伝えられました。そして原爆投下後10年間、「米日両政府の隠蔽と遺棄」のもとに声に出せなかった被爆者の忍苦の思いは1954.3.1ビキニ環礁での水爆実験と第五福竜丸の事件をきっかけに大きく原水爆禁止運動となって広がっていったこと。被団協の結成、その大きな運動の広がりの中、1956.8.10長崎での第二回原水禁世界大会において、「かくて私たちは自らを救うとともに、私たちの体験を通して人類の危機を救おうと言う決意を誓い合った」との結成宣言を受けて誕生した、被害者団体協議会とその後の歩みが語られました。



1957年には、初めて被爆者対策の「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律」(原爆医療法)が制定。しかし、この法律で規定された被爆者健康手帳の交付を受けたものを「被爆者」として認め、健康診断と共に「原爆症」と認められた疾病にのみ医療費が給付されるという大きな制限のあるものであったことなどが語られました。

1977年NGO国際シンポジウムにおいて、「<原爆>は人間に何をなしたか、人間は<原爆>に何をなすべきか」のもと全国的な被爆者調査の実施(4000人の調査員による8000人の被爆者調査)の中で、「被爆者」とは「原爆の犠牲者」としてだけではなく、「それに抵抗してきた人々」として位置付けられ、「HIBAKUSYA」が国際語となったこと。そして、その後の国内外に向けた幾つもの取り組みを経て2017.7.7には国連総会で「核兵器禁止条約」が採択され、この条約への批准・加入は、2020.10.24には50ヶ国に達し、90日後の2021年の1月22日に発効したこと。しかし、世界で唯一の被爆国である日本政府は、いま現在、「署名国」としても加わらず、「締約国会議」にはオブザーバーとしてすらも参加していない。「バックルと財布の金淵だけを残して遺体すら見つからずに爆心地近くで亡くなられた父親」のこと。生まれる前から被爆者であることを余儀なくされた、ご自分を含めた胎内被爆者のこと。国外を含めて被ばくをされた方たちのこと。その一つひとつを淡々と、そして噛みしめるように話された濱住さん。映像と共に語られるその言葉は、参加者一人ひとりの心の奥深く静かにしみ込むように届けられました。また当日、会場のひらお保育園ホールには、外のデッキにも広がるほどにでした。その多くは、平尾のあちこちからまた周辺の地域から足を運ばれた高齢の方々でしたが、これほどの方がホールに集われたのは2011年の建て替え以来、私が園長を務めていた15年の中でも初めてのことでした。そして嬉しいことに参加者の多さと共に、終えてからの訴えに、50,000円以上ものカンパが寄せられました。

(国立市)

難病に負けない大平まゆみさんの「きりんのうた」に出会って 山本葉子

昨年11月19日の北海道新聞を見ていたら「闘病中の元札幌コンサートマスター大平まゆみさんと音大生つむいだ温かな曲」と大きな見出しで書かれていた。大平さんと言えば、kitaraの初期の頃、私の小学生の子どもたちを連れて、よくコンサートを聴きに行ったものだった。確かな技術と語りと豊かな演奏に、家族皆が感動した。しかしその後、大平さんはALS(筋萎縮性側索硬化症)となり、札幌を退団された。華々しいスターから、身体も動かせない、話せない、難病と闘う生活となり、どれほどの絶望感を味わっただろう。大平さん世代の私は気の毒で仕方がなかった。しかし、その後新聞で、大平さんが病気に負けずラジオのパーソナリティとして、視線入力で音楽やメッセージ伝えてこられ、活動を続けておられると知り、陰ながら応援してきた。



自宅でチェンバロを弾き語る筆者

がんばっているのだから、私もチェンバロを弾いてリハビリしよう、と励まされてきた。太平さんは、病の身となっても、世界の人々とひとつの心で、地球温暖化や戦争について深く受け止め、憂慮し、平和を願い何か自分でもできないか、とお考えになったのだと思う。その生きる姿勢が素晴らしい。崇高な精神を持つ方だ。そういう強い意志に根ざした演奏をしていたから、人々の心を打ったのだ。

大平さんの初めての絵本「きりんのうた」の内容は、日本の動物園に戦争のある国からきりんの親子がやってくる、ということになり「きりんさんの親子をお迎えする歌を歌おう」と考えたが、他の動物たちのような歌がない。替え歌もへん。そこで、ヴァイオリンが大好きな大平まゆみさんが、なんとも素敵なきりんの歌を作詞作曲し、みんなで歌ってきりんの親子をお迎えすることに。お話しはここで終わっている。絵はひだのかな代さん。お話しと絵がぴったりで、とてもすばらしい絵本に仕上がっている。巻末に楽譜がのっており、視線入力で、太平さんが作曲した曲を真幸が五線譜に書き写し、編曲し、仲間4人と演奏した様子をQRコードから読み取り曲の演奏を聴くことができます。また、もうひとつのQRコードからは、大平さんの読み聞かせをボイスター(音声合成ソフト)で聴くことができます。真幸は、なんとかか力になりたいと思ったそうです。良い出会いとお仕事に恵まれたことを感謝します。私もがんばらなくちゃ、と太平さんから勇気と力をもらった。今後は、こういう形でも大平さんは自由に作曲することができるでしょう。生きるということは大変ですが、可能性は無限大だと思う。それを大平さんに教えてもらった。

その前後に、私も難病のパーキンソン病に罹患したのである。長男真幸(まさき)は、そのような音楽の環境の中で育ち、私が難病を発症したあと、まもなく東京藝術大学大学院修士課程に進学した。きっと大平さんの演奏も、心に残っているだろう。私はその後、太平さんの情報を見る度に勇気ももらい、太平さんも難病に負けずに



年末年始に集中治療を受けるため入院し、言語療法に出会った。そこでひと月、聖書のみことばのシュツの歌や典礼聖歌を通して訓練し、歌うことを取り戻した。人生の原点に立ち帰った思いだった。恩師に報告すると、「葉子さん、これからはあなたは合唱というよりむしろソロでチェンバロを弾き語りなさい。あなたならできます」と励ましてくださった。真幸も「がんばって」といって励ましてくれた。「何より、音楽の道に進んだのは他でもない母のおかげなのです」と先日初めて明かしてくれた。音楽をやってきてよかった。大平さん、私も難病に負けず、時代を越え、国を越え、人々の心に響く音楽を伝えていきたいと思います。たとえできなくなっても、音楽による福音を生きていく道を、大平さんのように、見つけてみたい。(札幌市)

エスペラント語の普及に力を尽くしている前橋市にお住いの堀泰雄さんには、世界中からエスペラント語でメールが届きます。日本語に翻訳された一部を紹介します。



2025.2.28 コンゴ民主共和国

私の名前はシャルリン・トゥムシフです。私は1996年4月にコンゴ民主共和国のゴマ市で生まれました。私は看護師ですが、現在は失業中です。

私は2014年にエスペラント語を学び、2016年から少しずつエスペラント語を教え始め、今ではエスペラント語は心の言葉なので、私の一番好きな言語になっています。それはすべての人を団結させ、誰も排除しません。エスペラント運動には人種差別はなく、人々の出身地によって決まるものではありません。

タンザニアで開催されたアフリカ女性会議で私が行ったスピーチです。

私の国は、戦争、虐殺、不安の中に生きているアフリカの国の一つです。この戦争のせいで、私たちの姉妹や母親はレイプされ、子どもたちは孤児になり、女性は未亡人になり、娘たちは早期妊娠し、母親たちは望まない妊娠をしています。人間の命は蚊の命のようにみなされ、私たちは恐怖と絶望の中で生き、武装した男たちの邪悪さの中で生きています。路上には住む場所も食べる場所もなく、資源不足のため読み書きもできず、将来に絶望している子どもたちがたくさんいます。無実の子どもたちが栄養失調に苦しんでいます。戦争を止め、不安を止め、私たち自身の平和が必要です。この恐ろしい時代を生き抜いてきた人たちの中には、心の中に痛みを抱えて生きている人たちもいます。平和をと訴えます。(似顔絵:堀泰雄)



2月21日当別町のふくろう山にスノーシューで登りました。雪山登山は3年ぶりでした。(みな子)

お薦め本 北への旅は、やがていのちへの旅へと繋がっていく



評伝 森崎和江 女とはなにかを問いつづけて

堀和恵著 藤原書店 2,200円



帯文に「植民地下朝鮮に生まれた『原罪』を問い続け、炭坑の奥深くで人間と対峙した『まっくら』や体を売る女を描いた『からゆきさん』を書き、産む女/産まないにともに寄り添った」とありました。

70冊に及ぶ森崎の著作と、思索の歩みを3章の構成で振り返っています。

大和政権の「国造り神話」による上書きを一枚一枚、はがしていきます。そして北への旅は、やがていのちへの旅へと繋がっていくのです。海女を追って若狭に辿りついた時のこと。森崎にはどうしても、「産小屋」が産を不浄のものとした考えから設けられたとは思えなかった。ゆたかにいのちをもたらす海の女神を信仰しつつ、海を日常のくらしの場としてきた海女の心には、産が不浄のものという考え方はうまれそうにない。産の不浄視は「男の感性」ではないだろうかと鋭く問います。はらまれた子どもというものは、他者としてこの世にやってくる。身の内の他者である。

いのちは、他者としてやってくるというのを、経験的に、具体的に知っているのは、女なのだ。女は、他者との向き合い方を感覚的に知っている。「天皇制下の男性中心の世界観と、古代からつながる女性の世界との大きな断層が、森崎の眼前に口をあけている」と堀さんは書きます。底辺に生きた多数の女性たちの姿が目に見えるようでした。

私はこの言葉が一番好きです。「死は生の終わりでなく未来の生命の母体となり、生はそうした死の堆積の上にあるのだ」。「ひとりひとりの生涯は終わっても、人びとが生きていてくれること。あの山の木が生きていてくれること。ーそれは、救いでもあり、祈りでもあるのだ」。森崎さんは2022年95歳で亡くなりましたが、悔いのない人生だったと思う。

淡路島から北海道の日高の山奥に入植して、懸命に働いた祖父母の人生に思いを馳せました。その姿は死んでもなお私の心に生き続けています。著者の堀さんは森崎の人間性を丹念に追っていて、私がかかるか昔に、祖父母の人生を聞き書きしたいと思った日を思い出させてくれました。(樋口みな子)

心の痛みの重さを問う

言葉の現在地 2017-2024

関口裕士著 北海道新聞 1,980円



北海道新聞に連載されたシリーズが1冊の本になりました。「社会と言葉」「原発と言葉」「沖縄と言葉」「戦争と言葉」「

沖縄と言葉」「戦争と言葉」「創作と言葉」の5章からなり、関口さんは、分かりにくいことを伝えたいと、全国各地に本人から言葉の真意を聞いたインタビューをまとめました。「言葉の現在地」と関連インタビューから計59本を収録。

どんな人にも同じ目線で問います。その誠実さと構成力に感銘を受けました。

話題となった発言や事象・著作について、時間を置いた時点から振り返りその発信者たちに取材しました。今のニュースが並ぶわけではないけれど、発言者の真意を丁寧に掬い取っています。

福島原発事故から14年。政府や電力会社はその責任をまったく取らず、事故がなかったかのように、原発の再稼働を進めているだけでなくエネルギー基本計画を改訂し新設、増設まで盛り込みました。原発に反対し続ける小出裕章さんの項を読み返しました。「多くの人が福島のことを忘れさせられてしまっているという事実は、私の目の前にあります」。「私にしかできないことは今もあると思います。(略) ただし、何でもかんでも私に任せて発言させて、それで済むと思っはいけない。私の言ったことが、その人の心に届いたならば、その人自身が自分の言葉で発信する。自分の足で立って自分の生活の中で活動するということをやらなければ、そんなものはすぐダメになってしまうのです」。私に問われたように思いました。諦めてはいけません。私に何がやれるだろうか？

大石芳野さんは3.11の震災と福島原発の時、カメラマンとして現場を訪ねました。見えない放射能をどうやって撮ろうと考えたのかという質問に答えた大石さんの発言が心に残りました。大石さんは以前から目に見えないものを撮ってきたカメラマンです。「人間を撮るんです。困っている人、悲しんでいる人、それでもたくましく生きる人…。人ごとではない。そう思って撮ります」。

私は大石さんのカンボジアやベトナムの写真集を持っています。子どもたちの悲しみが手にとるように伝わってきて大切にしています。

インタビューのまとめだけでなく、文章の終わりに著書の紹介があるのが嬉しいです。トップの赤木智弘さんの「若者を見殺しにする国」からラストの黒柳徹子さん「続 窓ぎわのトットちゃん」まで、この本が全国に広がってほしいです。(樋口みな子)

日々、新しいことばと出合い日本語を守る

ことばの番人

高橋秀実著 集英社 1,980円

本書は単なる校正や校閲に関する本ではなく、それに携わる人たち

に取材し、そのことを機縁として言葉や文字、漢字と日本語の成り立ちと言語としての課題などを考察しており、本居宣長やウイトゲンシュタイン(この本の表記のまま)の言葉に対する考え方なども引用・解題していて、私も校正なしでは通信の発行はできないので、興味深く読みました。

ユーモアを忘れない著者が、校正者たちの仕事、経験、思考、エピソードなどを紹介。校正に纏わるいろいろな面白いトピックスが多く紹介されている。中でも伝説的な校正者、その方の蔵書は辞書だけで7000点を超えるというから驚きです。たとえ名文であっても誤字脱字ひとつで

台無しになる。誤字脱字がないだけでも名文として読まれる可能性は残されるのだ、という。

著者が25年以上のキャリアを持つ校正者の山崎良子さんに取材した項が一番面白かったです。

「面白い原稿は要注意です」「エクスタシーの状態において発する語には、誤謬のことが多い」「私が常に思っているのはこの本で不当に不利益を被ったり、傷ついたりする人があってはならないということです。間違いは不利益をもたらします。東日本大震災の時も原発周辺の方々が誹謗中傷されました。ああいうことは絶対にあってはなりません」と厳しい口調で宣言したことを受けて著者は「言葉の校正とは社会を校正すること。かつてマルティン・ハイデガーが『言葉は存在の家です。その住まいに人間が住まうのです』と言っていたように、言葉の家に住む私たちを守っているのは校正者である。彼等は私たちの『番人』と言えるのではないだろうか」と記しています。校正する人への敬意が込められていて、私も襟を正される思いがしました。(樋口みな子)



科学が新しい世界を見せてくれる

藍を継ぐ海 伊予原新著
新潮社 1,760円

2024年直木賞受賞作。地球科学がテーマの5編。

「夢化けの島」では山口県見島の萩焼の失われた土、「狼ダイアリー」では奈良県吉野のニホンオオカミの血脈をひく狼混犬、「祈りの破片」では長崎県の長与町の被爆した瓦礫、「星隕(ほしお)つ駅通」では北海道遠軽に落下した隕石、「藍を継ぐ海」では徳島県姫ヶ浦のウミガメの産卵。それぞれの土地に根付く科学、歴史、伝統工芸、そして自然や命といった要素がそこに生きる人々の感情や葛藤と深く結びつき物語は進んでいきます。

科学的知見が随所に散りばめられていて、読者に分かりやすく解説してくれるので、読みやすい。しかも的確に表現されていて、とても面白かったです。

「星隕つ駅通」を少しだけ紹介します。オホーツク海に面した人口2万に満たない小さな町、遠軽町白滝の山中に隕石が落ちたことから物語が始まる。遠軽という町名の由来はアイヌ語のインカルシュベ、見晴らしの良いところ、町の象徴的な岩山、瞰望岩(がんばらういわ)これをさしたアイヌ語に漢字をあてはめたようです。あとがきで、多くの取材先と主要参考文献を記載。多岐にわたって物語に深みを生み出しています。

「一人でいたいとき、いるしかないときは、孤高のオオカミを気取る。(中略)寂しくなったり、何かに行き詰まったりしたときは、従順な犬になる」。人生を言い当てていて心に響きました。どの作品も最後には心が温まるような終わり方で、読み終えた後、自然に触れたくなるような気持ちが湧き上がりました。

NHKTVDドラマの「宙(そら)わたる教室」は伊予原新さんの原作です。夜間高校を舞台に理科教員とさまざまな事情を抱える生徒たちが「火星のクレーター」を再現する実験で学会発表を目指す物語。科学の世界を具体的に描き毎回楽しみに観ていました。夫がいけないのが残念です。(樋口みな子)

移民の受難と苦悩を描く

ブラディ・コーベット監督『ブルータリスト』(2024年)について 坂尻昌平



暗い船内を手持ちカメラの荒々しく揺れる映像が、主人公となる男の肩越しに映され、その挙句に視界に現

れるのは、あの誰もがアメリカ合衆国に入った時に見る巨大な彫像だ。しかし、「自由の女神像」と呼ばれるその彫像は、逆さまになっていて、やがて横倒しのイメージで終わる。男の名前は、ラースロー・トート(エイドリアン・ブロディ)というハンガリーの建築家で、1947年、ホロコーストを生き延びて、ようやく「自由の国」アメリカに着いたのだが、にもかかわらず、直立すべき「自由の女神像」は、横転している。ラースローを待ち受ける運命の苛酷さをあらかじめ告げるかのような皮肉な幕開けである。

バウハウス(モダニズムの源流となった教育機関)に学びドイツでは将来を嘱望される気鋭の建築家だったラースローは、知らない土地アメリカではただの移民にすぎない。しかも、妻と姪をヨーロッパに残し、従兄弟を頼って来た彼はしがない家具屋の設計士兼従業員として雇って貰うことになる。富豪の屋敷の図書室を大幅に改装することを御曹司に頼まれ、ラースローは建築家としての腕を存分に発揮してモダンに改装してみせる。ところが、そこに社長のハリソン・ヴァン・ビューレン(ガイ・ピアース)が帰還し、あまりに変わってしまった図書室に唾然とし激怒する。忽ち雇用主でもある従兄弟から解雇され、失意の中、建築現場の日雇い作業員となる。ある日、ラースローを訪ねて来たハリソンが、今度は恭しく前回のことを詫び、新聞や建築雑誌の記事やそこに掲載された建築写真を見せながら彼のことを褒め称え、亡くなった母の名を冠した「マーガレット・ヴァン・ビューレン・コミュニティセンター」をペンシルベニア州ドイルスタウンに作ってくれないか、と申し出ることになる。掌返しに態度に最初は半信半疑だったラースローも、多額の小切手を渡されて本気になる。ここから「ブルータリスト」建築家ラースローの本領発揮ということになる。「ブルータリズム」とは、50年代にル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエらのインターナショナル・スタイルのモダン建築を踏まえ、イギリスのスミッソン夫妻が、荒々しいコンクリート打ちっ放しのスタイルで機能主義の建築を作ったことから世界に広まった建築様式だ。小高い丘の上に建てられた、コミュニティの集会所であり、プロテスタント教会であり体育館や図書館を併設され「コンクリートの打ちっ放しや大理石、鉄鋼で作られている」「精神的かつ知的な自由の新時代を象徴」する壮大なプロジェクトであった。ここで引用した劇場で配布される葉には、実在した「ラースロー・トート」のプロフィールとこの建築物についての細部の写真や解説付きの図面が簡潔に紹介されている。ここで、はたと疑問が生じる。この映画は、実在し

た建築家の実話に基づいた映画なのか、そうではないのか？最後まで観た後に、調べてみると実話ではなかったことがわかる。見事に騙されてしまった。いかにもそうであろうというホロコーストの生き残りの建築家ラースローが、アメリカン・ドリームを求めて数奇な運命に翻弄される物語を補強するかのよう差し挟まれる、当時の記録映像の数々が喚起する本当らしさの連続に、誰もががっかりこれは本当の出来事なのだと思うされてしまう。最初からフィクションとして観るのは違い本物を装った偽の伝記映画なのだ。

映画は、白黒画面ではじまる「序曲」とその後続く「第1部 到着の謎 1947-1952」で建築模型を見せ、丘の上では建築が始まる。一旦、「インターミッション」が挟まれる。15分間、ハンガリー時代のラースロー夫妻の大家族写真が映され、時間がわかるように15分から徐々に減少し、最終的に0になる。「第2部 美の核心 1953-1960」が、ハリソンの失踪となり、霊廟のような地下で終わる。次いで「エピローグ 第1回建築ビエンナーレ 1980」が加わる。特にこの終幕は、テレビのビデオ画面のざらついた質感と実際に撮影された画面が交互に現れ、よけいに実在の人物を映したドキュメンタリーのように見える。この映画では、アメリカン・ドリームに失望し、イスラエルに渡った姪のジョーフィア(ラフィー・キャシディ)が、口のきけないラースローに代わって見事に彼を讃える。「コミュニティセンター」の狭く区切られた部屋は、彼が過ごした強制収容所と同じ面積だが、ガラス張りの天井へと至る吹き抜けの部分は新たに設計されたもので、そのガラスに縁どられた光の十字架が、下で礼拝する人々に降り注ぐ。それは復讐なのか抵抗なのかはわからない。(映画研究者)

大切な人に会い たくなる

『ファーストキス
1ST KISS』

坂元裕二脚本・
塚原あゆ子監督



駈(かける・松村北斗)が事故で亡くなったのは夏のある日。カンナ(松たか子)が時空を飛び越えるところから始まります。

舞台美術家のカンナは、天井裏から舞台の役者に拳銃を見事に落下させる。その後冬の首都高速道路を走りぬき、トンネルを抜けると緑豊かな景色に変わっている。なぜか真夏。ここで夏休みの宿題をしている小学生にポラロイド写真を撮られます。そしてまだ出会う前の駈と出会います。

若き日の駈に再会したことで、カンナはもう一度彼に恋をする。そして15年後の駈を救うために未来を変えようと奔走します。カンナ役の松たか子のコメディアンぶりも出色。カンナは、若き駈と言葉を交わすなかでどんなに彼を思っていたのかを思い出します。タイムリープしたあとの最初の駈との会話。名前を呼んでもらえたことに驚きながら喜ぶ駈は、たくさんの犬に囲まれ恐怖に震えるカンナを助けます。ロープウェイの中、柔らかい夕陽の中でカンナを包むように「この時間が終わらなければいいのに」という顔を見せ、「この気持ちはなんだろう」と逡巡している駈。

カンナと駈のたたずまいが美しい。

駈の素朴ながらも魅力的な演技に目を見張りました。タイムトラベルというファンタジックな設定とユーモアを効かせた作風が柔らかく全体を包み、一時も見逃せない、聞き逃せないと夢中にさせるのです。

最後のタイムトラベルで駈が2024年7月10日に死亡する旨を記したポストイットをカンナが落としてしまい、それを駈に見られてしまう。駈は未来のカンナの目の前で過去のカンナの姿も目にし、ついにカンナを問い詰めて本当のことを話さざるを得なくなってしまう。後半は駈が主役。どうして自然な演技ができるんだろう。

「パン屋を一緒にやろうというのは、ほぼプロポーズです」。「うん。そうだよ」とうなずく私。「これ以上、僕をドキドキさせないでください」。何度も聞きたいカンナの嬉しさが伝わりました。「過去は消えるものではなく、過去と現在と未来は同時に存在している」と駈が語るシーン。私も何度そうあってほしいと願ったことか。「君は柿ピーの柿が好きで、僕はピーナッツが好き」。価値観が対照的な二人は惹かれあいます。会話の中に食べ物がたくさん出てきます。かき氷やとうもろこし、そして駈が亡くなってから届いた餃子。一緒に食べたものの思い出は誰にでもありますね。夫は皮からこねて作る中国風の水餃子が得意料理でした。友人たちにもご馳走したことを思い出して泣けました。

恐竜などの考古学を専攻している駈は「人の一生なんて、“チュン”というくらい短い」というようなセリフをふと言う。さすがに科学者です。カンナは駈に「最初はよかったけど、徐々に仲が悪くなる」と正直に語ると駈は「僕は15年後にまた君と会えるなら、あそこにいる今の君と出会うよ」と言い、「15年間を変えればいい」とカンナのことを受け入れます。駈は「寂しいという気持ちは好きから始まる」という言葉をカンナへの手紙に残しました。駈は真面目で変わり者で不器用で愛らしい。『夜明けのすべて』など、俳優としてめきめきと成長しつつある松村北斗の、29歳と45歳の驚くほどリアルな演技分けに魅せられました。私は松村北斗の声が好きです。一昨年亡くなった夫は星が大好きで、天文学を極めたかった人。夢かなわず、理科教員になったけれど、学校祭では大きなプラネタリウムを生徒たちと作ったり、夜の天体観測会を開いたりしました。結婚前、星の話をつつまでも続ける夫と駈が重なって、涙が止まらなくなりました。天然な駈に癒やされ、カンナがタイムトラベルを繰り返すたびに駈を愛おしく思えてくる。その想いは私も同じでした。結婚を悲観していたカンナが、最終的にたどり着くのは、人生はめぐり逢いで出来ているという真実でした。観終わってふたりの誠実さと思いやりが満ちていることに気が付きました。その余韻に浸かりながら、駈の未来は変えられなくても「いつもそこにいる」のだなど、心が温かくなりました。私も前を向いて生きなくては。素敵ラブストーリーでした。(樋口みな子)

札幌映画サークルの会報4月号に掲載予定です。

ボブ・ディランの若き日を描く

『名もなき者』
ジェームズ・マンゴールド
監督



世界的なミュージシャンのボブ・ディラン。2016年には歌手として初めてノーベル文学賞を受賞しました。そ

の若き日を描いています。ディランをティモシー・シャラメが自身で歌っていて、すべての楽曲が吹き替えなし。魂がこもっていて圧巻！ディランが無名の頃から1965年のフェスでロックを爆発させるまでの5年間を描いています。

ディランは「風に吹かれて」「ミスター・タンブリンマン」「戦争の親玉」「時代は変わる」「マギーズ・ファーム」などの名曲の数々が彼の歌によって蘇ります。

ピート・シーガー役のエドワード・ノートンと、ジョン・バエズ役のモニカ・バルバロの歌も素晴らしい。時代の声を詩にして音楽で伝えたディラン。しかし新しい音楽を模索して葛藤するのは。公民権運動を支援したシーガーやバエズらはフォークソングは多くのアメリカ市民の心を奪い、ディランもその道を行くのが当然とされる中、シーガーが主催するニューポート・フォーク・フェスティバルで、彼はついに大きな決断をする。フォークギターではなくエレキギターを手に、「ライク・ア・ローリング・ストーン」を歌うディランの勇気に感動しました。当時、若者向けのロックは反体制を否定する転向と受けとられたそうです。そんな白けた聴衆の中にも、少なからず共感もあったと感じたのは私だけではないと思います。

恋人のシルヴィアとの愛と別れ。また、音楽的なパートナーのバエズとの関係も綴る。さらにディランの歌の背景となったキューバ危機、公民権運動、ベトナム戦争などの時代の空気も映し出します。

ディランの歌は特に「風に吹かれて」が好きです。

どれだけ見上げれば空をみることができるだろう
どれだけ聞こえるだろう人々の泣き声を
どれだけ人が死ねば死に過ぎたと思えるのだろう
答えは風に吹かれている
答えは風に吹かれている

ウクライナやパレスチナでたくさんの方が亡くなっています。一日も早く平和が戻ることを祈ります。

(樋口みな子)

購読料と寄付、著書をありがとうございます
(敬称略)2025.1.29~3.17

宮森多恵子 坂尻昌平 阿保亘 竹田とし子 岡村雄二
張玉龍 松元保昭 安部裕美 高橋儁 福山桂子
川原勝利 芳賀孝郎・淳子 高橋明子 西村武彦
山本伸夫 植村裁判を支える会有志 合計87,500円は印刷と送料に使わせていただきます。上條敏昭さん、堀和恵さんからは著書をいただきました。1面タイトル横にも記していますが購読料の振り込みはゆうちょ銀行(記号)19710 番号02218911 多銀行からは(店名)978 普通預金(口座番号)0221891 ヒグチミナコ宛にお願いします。

宮澤弘幸墓前に誓う「戦争ノー」



2月23日、新宿・常圓寺で宮澤弘幸七十九回忌法要と墓参、「北大・戦後世代をつなぐOB/OG会」主催で『宮澤・レーン事件を忘れないー2025 宮澤弘幸命日のつどい』が開催された。常圓寺祖師堂で法要後、参列者一同で供養塔に墓参した。

つどいはDVD「宮澤・レーン事件構成劇『エルムに寄せて』」を鑑賞後、宮澤弘幸の姪・福原恵美さんが法要参列へのお礼を述べ、「真相を広める会」元代表・山野井孝有さんが戦争へ突き進む現状に危機感を訴えた。新宿ルノアールに移動した後、黒澤多佳子さんが「ダーチャさんが私たちに伝えたかったこと」、小宮まゆみさんが「戦時下、日本国内にあった敵国人抑留所」、奥井登代さんが「ダーチャさんを招いた札幌での活動報告」などを行った。「宮澤・レーン事件を忘れない」「戦争ノー！」のために、意義あるつどいとなった。(東京都・福島清)

エスペラント語を広めよう ネパールのヒマラヤの集い



1995年から、ほぼ毎年、2月26日から3月9日まで開催されます。私は、全部で20回くらいネパールを訪問しました。ネパール人は貧しく、海外旅行も自由には出来ないの、外国からエスペランチストを呼び、財政活動に役立てる、エスペラントが実際に役立つ体験をネパール人に体験してもらおう、という2つの目的で始めました。私は、多い時には15人近くの日本人を連れて行ったので、ここまでこの集いが継続したのは私の貢献があったからです。コロナで中断、その後は、私の家庭事情で、2023年に参加したのを最後に、参加が出来なくなりました。今年の参加者の写真を見ていると、10人以上の外国人の顔が見えるので、私なしで、運動が進みつつあるのかなど、ほっとしました。(前橋市・堀泰雄)

各地から春のたより



チベット正月を日光で祝う

2月28日はチベット暦の乙巳の正月。ランタンやカトマンドゥからも賑やかな祝意が伝わってきます。26日、故チェンガの長男クガ・ギャルツェンがやって



きました。テンバの嫁が私へと託してくれた新年用のルンタとタルチョーを持ってきてくれました。

お正月に間に合わせなければと一ヶ月くらい前に日本の研修先に休暇を申請していたようです。前日に私のパートナー（明石）とクガとで去年のルンタを外し新しいのに張り終えました。

明石がクガに2001年ランタン谷でロケした映像を見せていました。ランタン村の若者たちの試みを取材したもので、『世界で一番美しい谷で』（素敵な宇宙船地球号）というテレビ朝日で放映した30分の作品です。クガの父チェンガが中心となって小型水力発電の管理運営（各戸への送電）、夜間識字教室、パンやチーズ作りなど本当によくやっていたなと思います。映像に残るクガの父親は当時26歳、クガは2000年生まれの今年25歳。ほぼ父親の年齢に達しています。働く父親の姿や肉声に触れたクガがどのような感慨を持ったかわかりませんが、明石も私も記録することの大切さを思ったことでした。そしてこの日本の我が家で、時空を超えて、ランタンの親子が対面していることに不思議の念を禁じませんでした。チェンガにもクガにもありがとう！山の写真は左から男体山。太郎山、右に少し見える裾野が広がっている女峰山（日光市・貞兼綾子）



2月末に台湾を訪ねました食べ物の値段は日本よりやや安い。夕方からの夜市（写真）は有名どころだと魯肉飯（ルー

ローハン）はとろとろのお肉の旨味がたっぷりの丼）小籠包・排骨（飯・麺）麺類・おかゆ類・独特なおいの臭豆腐や日本のお好み焼きやたこ焼きなどを模した料理も売られています。台湾はもともと外食が多いとか。この規模の夜市が365日営業しているのは凄いと思います。

台北市の南部に位置する猫空（マオコン）（右写真）は自然とお茶文化が織りなす癒しのスポットです。標高約300メートルの丘陵地に広がるこのエリ



アでは、地元の茶芸館やカフェで高品質な台湾茶と絶景を楽しむことができます。「猫空」という名前は、かつて野生の猫が石の隙間を隠れ家にしてきたことに由来し、ユニークな魅力もあります。（江別市・菊地宏治）



2月8日近所の小さな滝川で撮ったダイサギ（前橋市・堀泰雄）



3月1日自宅で撮影した豊後（ぶんご）梅（上）と2月27日に撮影した鎌倉市十二所果樹園の玉縄桜（横浜市・高島武雄）



2月某日、自宅の庭で手乗りのヤマガラ（神奈川県大磯町・石川旺）



3月11日、近くの光則寺の馬酔木（あせび）。さまざまな花がまだ蕾でした。（鎌倉市・太田朋子）